企業から見たインターンシップ

DeNA

プログラミング経験のある学生なら、「自身のスキルはどれくらいのレベルにあるのか」「ビジネスで通用するのか」を知りたいのではないだろうか。実践型プログラムのインターンシップであれば、実際のプロジェクトに参加しての業務体験を通じてそのような疑問を解消することができるだろう。このページではネットサービスの最前線で活躍しているエンジニアとともに働くことができる、DeNA の実践型インターンシッププログラムを紹介しよう。

“アシスタント”ではなく、“同僚”として働く体験がITエンジニアとしてのキャリアを拓く

国内最大級のネットサービスを実際に作るインターンシップ

ユーザー数2700万人（2011年3月現在）を擁する国内最大級のソーシャルメディア「Mobage」を運用しているDeNA。同社は今夏「エンジニア向け開発・構築実践型」と「ビジネスコンテスト型」の2種類のインターンシップ開催を予定している。中でもITエンジニアを志す理系学生に注目してほしいのは、同社のエンジニアとともにプロジェクトの最前線で業務体験ができる前者のインターンシップ「DeEP2011」だ。

「このインターンシップは技術に特化した内容になっており、エンジニアとして技術を極めたいという方にとって魅力的なプログラムとなっています」と語るのはDeNAシステム統括本部技術戦略部部長の能登信晴氏。このプログラムの最大の魅力は、国内最大規模のユーザーを支えるインフラの設計・構築や、ユーザー向けサービス設計・開発、データマイニングなどを手掛ける各現場に配属され、現役エンジニアとともに実際のプロジェクトに参加できるという点だ。1日何十億というページビューをさばくサーバ構成を設計・構築したり、日々大量に蓄積される実データを用いたデータマイニングを行い、新たなサービスを生み出したりすることも可能。さらに、ネットサービスはユーザーレスポンスも速いので、自分の手掛けたサービスに対するユーザーの反響を知ることもできるという。

ビジネスで求められる技術を知る、またとない機会

DeNAがこのプログラムを通じて学生に知ってほしいのは「ビジネスの現場で求められる技術やノウハウ」だという。「ビジネスの成功のためにどのような目標を立てて開発・運用を行っているのか」「企業内ではどのような技術やフレームワークが用いられているのか」「問題解決のためどんなノウハウがあるのか」といったことは実際に会社に入ってみないとなかなか見えてこない。「学校の授業・研究とビジネスの大きな違いは、プログラムはただ動いただけでは駄目ということ。多数のお客様に使っていただいて喜ばれること、便利だと思ってもらうこと、それを通して収益を上げること、そこまできちんとたどりつけるかが重要です。また技術的には、将来的な拡張性を考慮した設計・プログラミング、可読性の高いソースコード、エラーハンドリング含めトラブルが起きた時のリスクヘッジ、復旧手法など、サービスを継続しつつ

大きく育てるための基盤作りが重視されています」（能登氏）

同社が採用活動を通じて学生と接する中で気になるのは、現場のソフトウェア開発において重要かつ一般的な要素、例えばデータベースやウェブテクノロジーなどをあまり重視していない学生が少なくないことだという。大学で学ぶ理論ももちろん大切だが、エンジニアとしてのキャリアを考えるのであれば「ビジネスの現場では何が求められているか」を早い段階で知ることは欠かせないだろう。

また、一緒に働くＤｅＮＡのエンジニアから学べることは多いはずだ。同社で活躍するエンジニアの中には、技術書を執筆している方やオープンソース活動をしている方、社外メンバーとの勉強会を主催している方など、業界でも名の知れたエンジニアが複数在籍している。そのようなエンジニアと机を並べ、技術面はもちろん、エンジニアとしての姿勢や考え方などを学べるのは、ＩＴ業界を目指す学生にとって願ってもない環境といえるだろう。

ＩＴ業界と一口に言っても、企業カルチャーは千差万別

「ＩＴ業界とひとくくりにされますが、ＳＩ、ハードウェアベンダー、ソフトウェアパッケージ企業、ネットサービス企業でやっていることはそれぞれかなり違う。その違いを早い段階から肌で感じてほしいですね」と能登氏が語るように、ＩＴ業界には何千人ものエンジニアが集まり、数年かけてシステムを作り上げる企業がある一方で、ＤｅＮＡのように一人が数週間～数カ月というスピードで感でサービスをリリースしている企業もある。仕事内容が違えば当然、会社の開発スタイル・カルチャーも変わってくる。

会社風土は企業を選ぶ上で非常に重要な要素だが、実際に入社してみなければわからないことが多いのも事実。〝永久ベンチャー〟を掲げるＤｅＮＡは、入社一年目の社員に新規プロジェクトの立ち上げを任せることが珍しくないなど、入社年次に関係なく仕事を任せるフラットな企業風土がある。いい意見であれば立場に関係なく採用される環境もあるといい、それはインターンシップ参加者についても変わらないとのこと。「短期間とはいえ一緒に働くからには〝アシスタント〟ではなく〝同僚〟として迎え、良い提案があればどんどん取り入れたい」と能登氏が語るように、そのような企業風土に自分がフィットし、楽しめるかどうかを見極めるのもインターンシップに参加する上で大切なこと。インターンシップを通じてそういった企業カルチャーの違いを知り、自分に合った働き方を考えてみてはどうだろうか。

歓迎するのは「想定外のことをやり始めてしまう方」

〝実際のプロジェクトに参加する〟と聞くと「非常に高度なスキルを持っていないとインターンシップに参加できないのではないか」と思われる方もいるかもしれないが、今回の応募資格は「必須条件は何らかの言語でのプログラミング経験があり、自分のアイディアを簡潔に実現できる力を持っている方。Ｌｉｎｕｘ環境での開発経験があれば歓迎する」とのこと。スキルと同じくらい重視されるのは本人の〝自発性〟だという。「受身で指示を待っているのではなく、状況を把握した上で『これをすべきだ』と課題を見つけて取り組めるような方と一緒に働きたいですね。独自の視点を持ち、私たちが想定していなかったことまで提案できる人を歓迎します」と能登氏が語るように、ＤｅＮＡは参加者による外部からの新たな発想や視点を期待している。このインターンシップでは自ら動き、提案することで、より多くの経験が得られるだろう。

理系学生へのメッセージ

早めにＩＴ業界の現場やビジネス構造を知ってほしいですね。会社によって事業が違えば、仕事のスタイルやカルチャーも違う。そういった違いを見極める視点を持ってインターンに臨めば、その後の研究活動や就職活動に活かせる要素はより多くなるので。（能登氏）

エンジニアを目指す方は、技術のアウトプットで世の中を盛り上げていってほしいですね。自分だからできること、キャリアを最大化するためにすべきことを真剣に考えてください。（本所氏）

株式会社ディー・エヌ・エー
システム統括本部
技術戦略部 部長
能登 信晴（のと・のぶはる）

株式会社ディー・エヌ・エー
ヒューマンリソース本部
人材開発部 新卒採用グループ
本所 卓也（ほんじょ・たくや）